

『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』 日本聖公会京都教区

季刊 フィル・ザ・ハーツ

Fill the Hearts

Harassment Prevention Committee 日本聖公会京都教区 ハラスメント防止委員会
〒602-8332 京都府京都市上京区烏丸町下立売上桜鶴岡 380



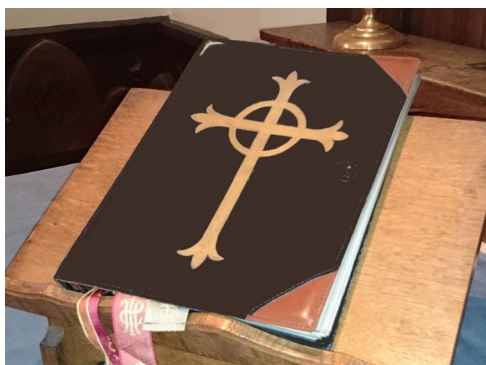
新型コロナウイルスの感染症に対する意識の違い

新型コロナウイルス感染症の患者の数は少しずつ収まりつつありますが、いまだに東京都を中心に多くの感染者が出ていますし、海外での感染拡大のニュースが報じられています。

これらの感染症のもとなるウイルスは目に見えないものなので恐怖感が募ります。しかしこのウイルスに対する恐怖感という感覚にはかなり個人差があります。ブラジルの大統領のように

「ただの風邪だ!」という方から、3月以来一歩も自宅を出ずに過ごしている方までかなりの差があります。これは家族に高齢者がいるなどの家族環境や、都心と感染者がほとんど出ていない都道府県の差のように意識が全く違ってきます。今の時期「喉元過ぎれば」で無感覚になっている方や、「もう大丈夫」と思っている方もいるでしょう。

大切なことは「大丈夫」と思っている人は「大丈夫ではない」と恐れている人の気持ちを理解すること。「大丈夫ではない」と思っている人も「大丈夫だと考える人もいる」ことを理解することです。互いに思いやりを持って行動することが大切なのです。どちらの側の考え方も誰も非難することはできませんが、その個々の考えからの行動が利己的であると互いを傷つけあうこととなります。大丈夫だと思っている人はそうでない方の気持ちを理解して行動すること、恐怖感を持っている人はそうでない方を一方的に非難したりしないことが必要です。意識に幅があること、互いの気遣いが必要ですね。



「より良いコミュニケーションのためのレクチャー・カフェ=フィル・ザ・ハーツ・カフェ」

より良いコミュニケーションを作り出すために、オンラインで楽しい学びをしましょう!気軽に参加ください。

日時 10/14(水)
午後8時~9時30分

対象 どなたでも
ご参加いただけます

Web形式
(参加されるにはパソコンかタブレット、
スマホとともにネット環境が必要です。)

場所

参加費用 無料

申し込み締切り 10/8(木)

申し込みはメールで nskk-kyoto@kvp.biglobe.ne.jp
日本聖公会京都教区教務所内 ハラスメント防止委員会宛
件名に「フィル・ザ・ハーツ・カフェ申し込み」とお書きください。
お申し込みの方には後日ZoomのURLとパスワードを送らせていただきます。



主催：京都教区ハラスメント防止委員会

今こそおもいやりにあふれた社会を取り戻しましょう。

「コロナの恐怖心は『互いを信頼する社会』から『人を疑い攻撃する社会』に変えたのではないのでしょうか。」

新型コロナウイルス感染症に対する恐怖は「疑う」そして「非難する」ことを容認する社会を作ってしまったように思います。通勤電車でマスクをしていないなどはもちろん、咳でもしよ

うなら厳しい視線が飛んできます。繁華街ですれ違う人がマスクをしていないなら批判するように振り返る人々。花粉症の方は胸に「私は花粉症です」というバッジをつけないとくしゃみをする

ことができない、などと冗談のようなことも普通に行われました。お盆に東京より帰省した家に「なんでこの時期に東京から来るのですか?…さっさと帰って下さい!!」と張り紙がされた

という報道がありました。自粛警察などという言葉があるように、疑いと批判・非難の応酬がネット上でも飛び交っ

ています。ツイッター上での応酬は見るに堪えないやり取りもあります。同じ価値観の者が手を組んでそうでない者を排除する。「これは集団をつくることで生き延びてきたヒトに特有の

脳の癖である」と脳科学者で認知科学者の中野信子氏は言います。外から見て全くおかしいとわかることでも、無意識に「自分の所属する集団のやっていることの方が正しい」と思い込み、しかもそれを人にも要求してしまうのだ

です。このように作られた『一つの価値観の集団』はそうでない集団を生き延びるために攻撃するようになります。この攻撃はこれから感染症に対する価値観の違いだけでなく、すでに感染症に罹患した個人や施設(クラスター)を出

してしまった病院や介護施設、大学)に対して行われるかもしれません。すでに罹患した京都の大学生の実家に石が投げ込まれたという報道もあります。恐怖が特有の常識を作り出し、その常識が集団をつくり、この常識を破るものには何を言っても良い、集団がそれを攻撃し、そこに迎合する人が集まる。

そのように人が人を攻撃する社会が恐怖によって容認され続けられないことを祈ります。

今こそ私たちが呼びかけられるのは、自己の責任感と他人への配慮の心です。他人の意見に簡単に迎合してごぶしを振り上げるのではなく、自分の意見を持ち、しかし他の意見をもよく耳を傾け相手の立場や心の内を察し、弱くされた人を温かく支えてあげる寛容な心を持つことが必要です。今こそ思いやりにあふれた社会を取り戻そうではありませんか。

引用 中野信子著「シャーデンフレイド」幻冬舎2018年1月30日第2版発行

(ハラスメント防止委員会 久保田展史)

「分断の境界線を越えて、共に在る」

司祭 三木 ヌイ

人類はたびたび伝染病と闘ってきた。聖書の中にもその痕跡が見られます。レビ記13章には、皮膚病に関する律法があります。皮膚病に罹った疑いのある者は祭司によってその症状が調べられ、どのような症状であれば「重い皮膚病」か、どのくらい隔離するか、どのように再調査するか、かなり詳細に書かれています。「重い皮膚病」であれば、祭司は「あなたは汚れている」と言い渡し、症状がなくなれば「あなたは清い」と言い渡す。

患者はわざと汚い身なりをして「私は汚れた者です、汚れた者です」と呼ばわらねばならない。このようにして伝染病患者(汚れ)とそれ以外の人々(清い)との間に、分断の境界線を作りました。感染拡大を防止するために古代の人々が考え出した対策ですが、結果的に患者は差別され、孤立させられ、介抱もされず放置されました。病者たちの苦悩は計り知れません。

イエスは、そういう状況の中で重い皮膚病を患った人と出会います。「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。」この祈りに応えて、イエスは手を差し伸べてその人に触れました。それは、当時の

社会に築かれていた分断の境界線を乗り越えて、差別されていた病者の側に立つ行為でした。私たちが今見つめるべき重要なメッセージはそこにあります。

「コロナに感染したら大変だ、怖い」と誰もが感じています。病気の原因が新型コロナウイルスであると判明している現代においても、各人が抱く恐れや不安から、他者を非難し、攻撃し、心を傷つける言動をとることに比べて、目には見えない分断の境界線を築いてはいませんか。私たちが歩むべき道は、分断と差別ではなく、共生と隣人愛です。そのことは、イエスの物語によってしっかりと示されているのです。

